

あなたもこの映画づくりにご参加下さい！！

# 「新あつい壁」

## 劇映画「新あつい壁」製作に寄せて

監督 中山節夫

ハンセン病患者を親に持つ子ども達の小学校入学拒否問題を題材にした「あつい壁」を撮ってから40年近くの時が過ぎました。今日では療養所の入所者と社会との交流も活発になりハンセン病やその療養所の存在すら知らなかった若い世代への啓発活動も広がり、療養所の内と外をめぐる状況は随分様変わりしました。また、らい予防法が廃止され強制隔離政策がまちがいであったことを国が認め謝罪もしました。



しかし、私たち一人ひとりの偏見や差別意識が払拭されることは簡単にイコールにならないということ、温泉宿泊拒否事件後の療養所自治会への陰湿な中傷や嫌がらせの事実がものごとになっています。

劇映画「新あつい壁」は、ハンセン病患者であることを理由に法の前の平等を踏みにじられ、驚くほど杜撰な裁判で極刑の判決を受け、死刑執行された50年以上も前の事件を通して、それを許した当時の社会の意識が今日どのように変わったのか、そして何が変わらないのかを描きたいと思っています。

私はハンセン病療養所のある町で育ちました。学生の頃より療養所に通い始め、大勢の入所者の方々と付き合いが始まりましたが、差別意識はないつもり自分の傲慢さに気づかされ、暗澹とした気持ちになったこともありました。そしてこれらの体験のひとつひとつがより合わさって今日の私を創ったのだと思っています。

この劇映画「新あつい壁」を撮ることはここまで私を育てていただいた方々への私なりの恩返しであり、映画監督としての社会的責務ではないかと考えています。そして「これは私たち一人ひとりの映画だ」と観客の皆様と言われるような心ある作品にしたいと思っています。

### あらすじ

フリーのルポライター卓也は、取材で知り合ったホームレスの男から、50年前に熊本で起きた殺人事件の話の話を聞かされた。

「犯人に、俺は、申し訳のねえことをしちゃって…その男は無実かもしれねえ」卓也は、これを取材すればいいルポが書けるかもしれないと、軽い気持ちで調べ始めた。それはハンセン病患者が犯人とされた事件だった。ハンセン病のこと、事件のことを調べれば調べるほど今では考えられないことがわかってきた。

そこにはハンセン病患者であるがゆえに今でも続いている差別と偏見に満ちた社会の状況と、それにとつた取り調べや裁判の事実があった。卓也は軽い気持ちを捨てて真剣に取材を始めた…

企画制作／映画「新あつい壁」製作上映委員会  
全国ハンセン病療養所入所者協議会

## 製作協力券 1,000 円発売中！

製作協力券で完成した映画の鑑賞も出来ます。

購入希望者は組合（内 3529）まで連絡ください。（取扱いは 8 月末まで）

## 映画「新あつい壁」製作に期待する

映画監督 中山節夫氏は、国立ハンセン病療養所 菊池恵楓園（熊本県）の近くで育ち、若いころから、療養所の入所者やその家族の苦しみを間近に見てきました。

一世紀にもわたる療養所の歴史や、その間に隠ぺいされてきた闇の世界は、今なお明らかにされたいはいません。

「らい予防法」にもとづく患者の強制隔離撲滅政策は、多くの患者を犠牲にし、これまでに厚い壁の中で2万4千人が死亡しました。患者の強制隔離は、偏見や差別をさらに助長し、家族への被害も辛酸を極めました。

一家心中、家族離散、村八分、就職、結婚への障害等々、差別は続いています。

国の誤ったハンセン病政策は、多くの負の遺産を残しているにもかかわらず、社会から忘れ去られ風化しはじめています。「忘れない歴史でも、忘れると同じ失敗をする」という諺があります。日本のハンセン病政策の誤りは熊本判決で明らかになりましたが、二度と同じ過ちをくり返さないための歴史の検証はまだ不十分です。

社会派映画監督 中山節夫氏はハンセン病問題の全面解決をライフワークとし、30数年前、映画「あつい壁」を制作し、深刻な差別問題を社会に問いかけました。

この度、闇に埋もれている歴史的事実をさらに掘り起こし「映画化」という手法によって再び広く市民に問題提起をしようとしています。

今回の映画製作で、私たちや家族の心情や立場をリアルに描いてくれると期待しています。

多くの市民のみなさんが、この映画を鑑賞され、偏見や差別を社会から一掃するために力をかして下さることを願ってやみません。

全国ハンセン病療養所入所者協議会  
会長 菅我野一美

### 中山節夫監督のこと

佐藤忠男

中山節夫監督の作品を初めて見たのは四十年前以上前のテレビのドキュメンタリーの「ある青年の出家」だった。ハンセン病の元患者の社会復帰を見つめた内容で、真摯で感動的な作品だった。次いで最初の劇映画「あつい壁」を一九七〇年に熊本で自主製作されたのだがこれはハンセン病差別問題をきつに本格的に扱った力作で、こういう作品が地方発の問題提起として全国に発信されること、私はそれまでの東京と京都本位の日本映画の歴史のひとつの転換点だと思つて、喜んで応援させてもらったものだ。

以来、中山節夫監督は、主として教育問題に的を絞つて映画を作りつづけているが、いじめ問題を扱った「やがて春」など、弱者の味方という立場が一貫していることが見事である。その間にもハンセン病の差別問題には、ずっと関わつておられて、私など、教えられることが実に多かった。

今度また、中山節夫監督はこの問題と取り組む映画を多くの人々による運動として作るという。ぜひ、やっほい仕事である。未だに深く根深い差別を、映画作家として見事に成熟してこられた中山監督がどう描き、未来への希望をどう提示して下さるか、刮目して期待している。まことにいい作品だと思う。

熊本大学教職員組合

No.1

2006.7.19

教育文化部会ニュース

TEL 342-3529 FAX 346-1247

mail: ku-kyoso@union.ac.jp